

---

# 【ラノベホラー】彼のポスター

たいらひろし

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

【ラノベホラー】彼のポスター

### 【Nコード】

N2429Z

### 【作者名】

たいらひろし

### 【あらすじ】

ライトノベルホラー。某新人賞の二次選考まで勝ち上がったお話です。pixivに掲載している小説を転載しております。

ホラー形式をとっていますが、流血や暴力、グロテスクな表現などは含まれていません。高校の掲示板に張り出されたポスターに『すき』という意味不明の落書きがされた。ポスター製作者の英介は犯人を捕まえようと躍起になるがなぜか見つからず、徐々に犯人の行動がエスカレートしていき……。

## プロローグ

「コンコン。たっだいまー英介。部屋入るよー。元気してたー？」  
「おう、お帰り姉貴。旅行、どうだった？」

「なかなか楽しかったよー。はいこれ、英介におみやげ。昔の、百年くらい前に製造された水彩絵の具だつて。こういうの、好きだったでしょ」

「昔の絵の具？ レアものじゃん。高かったんじゃないの？」

「そうでもなかった。たまたま立ち寄った国立公園で骨董市みたいなのが開かれててね、そこで投売りされてたの。貯蔵倉の整理のため、二束三文で売ってますー、とかいつて。どう？ 気にいってくれた？」

「……うん、うれしい。すげえうれしい。サンキュー姉貴。……ふーん。昔の水彩絵の具ねえ」

「あのさ。よかつたら、絵のモデルになつてくれねえか？」

早秋の放課後。柿色に染まる静寂の美術室へたまたま忘れ物を取りに顔を出した美弥へ、ひとり居残りしていた美術部の英介が決死の申し出をした。たつたこれだけ告げるのに三日もかかってしまった。以前からお願いしようと思っていたのだが、なかなかタイミン  
グがつかめなかったのだ。機会はいくらでもあつたというのに。

驚き顔をする美弥に英介が説明する。

「ほら俺、今度さ、掃除強化習慣のポスターを書くことになつてるだろ。モチーフをうちの高校の女子にしようと思ってるから、モデルがいたほうが描きやすいんだ。悪いけど、協力してもらえねえかな」

「ああ、なるほどね。かまわないよ」

ふたつ返事で快諾した美弥は、近くの椅子に腰をおろした。

「ああ、ちよい待ち。ポーズがあるんだ。少し足を開きつつ背筋を伸ばして立つ。視線はまっすぐ。それから、左手を腰に。右手は前方、水平に突き出して、人差し指をびしつと上にたてる」

アメリカンプロレスラーが「アイアムナンバーワン！」と叫ぶときの格好に似ていた。

苦笑しつつ美弥がきく。

「……なにこの姿勢。どんな意味があるの？」

「掃除をサボるなって叱ってるポーズ。んじゃ、さっそく始めるか」  
使い古したパレットと水入れ、そして古風なチューブに詰まった水彩絵の具をセットした英介がイーゼルに向かい、美弥が指示されたとおりのポーズをとり、ふたりだけの時間が訪れた。

絵筆を握った瞬間、英介の心からあらゆる雑念が消えうせた。英介の瞳がここではない遠くを見つめ、絵筆の先が画用紙上を踊る。

剣道部で鍛えられた足腰の賜物か、美弥は一度も休憩をはさまずに立っていた。

二時間は一瞬だった。窓の外はとうに紫色と闇色ばかりだ。

白い蛍光灯のした、英介が筆を置いたことで立ちっぱなし終了を悟ったのか、軽く伸びをした美弥がさっそくイーゼルを覗きこみ、

「あれ？ 全然、あたしに似てないじゃない。なんでよ？」

嫌味でも不平不満でもない、澄んだ疑問をのせた声で、英介に笑いかけた。

たしかに、彼女のいうとおりだった。

美弥は胸まで届く黒髪、輪郭が細く、引き締まった口元や眼鏡越しの切れ長の瞳が知的な印象を与える、一言で表現するならばキツネに似た面立ちだ。

対し、ポスターに描かれた少女は肩までしかない茶髪、ふつくらした輪郭に脱力気味の口元。たれ目がなんだか泣き虫そつな感じだ。眼鏡すらかけていない。これでは、さながらタヌキだ。

キツネ美弥とポスターのタヌキ少女。類似点といえば背格好くら

いなものである。

英介が頭をかきながら、

「だってさ、校内に張り出す風紀ポスターだぜ」

「あ……ああ、そうか。あたしと顔がそっくりだったら、おかしいもんね」

「そういうこと……悪かったな。二時間もぶつ通しで立たせちゃって」

「いいよ。きみこそ大変だったね。お疲れさん、英介」

気軽に目の前の男子生徒の名を呼び捨てにし、美弥はポスターを眺めてにこにここと目じりを緩めた。

まんざらでもなさそうな彼女を見て、英介は満足する。

好きな相手に似せて描くことができなかつたけれど、でも、充実した時間を過ごせたと思う。

風紀ポスターのモデルは、口実に過ぎなかった。

英介は、美弥の肖像を描きたかった。

自分の宝物である絵の具を、彼女のために使いたかったのである。

そのときからすでに、英介は、見られていたのだ。

## プロローグ（後書き）

作者のたいらひろしと申しますm）（m 普段はpixivというイラストサイトの小説サイドで活動をおこなっております。童話やホラー、ライトノベルからエッチな小説まで手広く投稿しておりますので、どうぞご覧くださいませ）（）【http://www.pixiv.net/member.php?id=1131262】

## 01 ポスターの落書き

『すき』

「……なんだこりゃ」

ほかに通行者のいない昼休みの廊下で、掲示板に張り出してあったポスターのいたずら書きを見つめながら、英介は憮然とつぶやいた。

そのポスターは彼が先生に頼まれて製作を手がけた、美弥をモデルにして全身全霊を注いだ作品である。

いたずら書きを発見した瞬間、英介の心に黒い感情がぶくりと湧いた。

英介は子供のころから絵を描くのが好きだった。継続は力なり。六歳くらいから十年間ひたすらに鉛筆と絵筆を走らせていた結果、こと美術方面において秋月高校で彼の右にでるものは三学年生徒先生ひっくるめて皆無である。ゆえに、つい先月。その手腕をみこまれて、学年主任の嵐山先生から『掃除強化週間』のポスター製作を頼まれたのだ。

英介は素直に嬉しかった。クラスメイトから「似顔絵描いて」とせがまれるのとは重みが違う、正当に自分の価値を認められたんだ、という気がした。

なのに、この落書きはなんだ。

たしかにこの作品は学校から依頼されたポスターなのだから、お色気や面白みとは無縁だ。タヌキ顔の少女が人差し指立てて怒っているポスターなど、ドラマに出てくる通行人Aみたく、まるつきり目立たないものだ。はっきりいってここを通るひとに存在を認知されているかどうかも怪しい。もちろん、だからといってそれがいたずらをしていい理由にはならない。

英介は落書きを凝視した。文字にも個性があり、筆跡を見れば書き手が男か女か、几帳面なやつかおおざっぱか、何歳ぐらいなのか

がわかる。ひよつとしたら、犯人割り出しの手がかりになるかもしれない。

そのふたつの丸文字は、鉛筆らしきもので書かれていた。『すき』

すき。……………好き、か？

英介の腹の虫が暴れだした。丸っこい筆跡からして十中八九、書いたのは女だろう。なにが、すき、だ。ひとの力作をラブレター代わりにしないでほしい。だれからだれへ宛てたメッセージなのかもわからないし薄気味が悪いし、第一、作者に失礼だ。

英介は鞆から消しゴムと引つ張り出し、傷がつかないように丁寧にポスターをこしこししたあと、ポケットから取り出したメモ帳をちぎってポスターのそばに添えた。

『いたずら書きはやめてください』

シンプル・イズ・ベスト。とりあえずはこれでいいだろう。

怒れる腹の虫をなだめながら、英介は教室へと戻った。

翌日の昼休み。人影のない廊下のポスター前にて、英介はこめかみをひくつかせていた。

『おへんじくれて、ありがとう』

ずっとあなたがすきだったの』

腹の虫が再び、わいのわいのと疼いてきた。

きのう落書きを消したと思ったら、翌日にこれだ。この落書き犯、ひとの誇りを土足で踏んづけることに気づいてない。これではポスターがかわいそうだ。ただでさえ泣き虫そうなタヌキ面の女子生徒のイラストが、ますます泣いているような気がした。っーかなんだ、この『おへんじくれて、ありがとう』ってのは。やつこさん、俺に宛てて書いてたわけか？ あなたって俺のことか？ ……って、んなわけないか。俺が残したメモには『いたずら書きはやめてくだ

さい』としか書いてない。それじゃ、個人を特定するのは無理だ……いや、まてまて。俺宛であろうとなかろうと、これ以上俺の作品に妙なことを書かないでほしい。

だれかいたずらの目撃者がいないかと左右を見渡してみる。  
ひとつこひとり、いやしなかった。

この廊下は人通りが少なく、落書きしてる最中にだれかが通りかかって「御用だ！」になる可能性は低い。きっと犯人も、人目のないときを狙って書いたんだろう。

なんてせこくて卑劣な犯人だ。すげえ頭に来た。

英介はシャーペンを握り、ちぎったメモ用紙に書きなぐった。怒りのままに動く指を止める気はなかった。

『いたずら書きはやめてほしい。』

このポスターは真剣に製作したものだから、落書きをされると本当に腹がたちます。

これつきりにしてください。

ポスターの作者より』

ふう、と一息。少しだけ、落ち着いた。

……なんか、無難な文章になってしまった。もつとこつ『こんどやったらお前の を してやる！』とか『落書き犯人へ あなたの家を知ってます。火の気に注意してください』みたいな、犯人がビビッて二度といたずらができなくなるくらいに恐ろしいことを書くつもりだったのに。自分は肝っ玉が小さいんだろうか。

しみつたれたメモ書きを残しつつ、英介は昼飯をたிரらげべく食堂へ向かった。

さらに翌日の昼休み。

我慢の限界というのは案外、簡単におとずれるものだということ、英介は体感した。

『ごめんね、怒らないで』

あなたとお話が出来たかっただけなの

えへへ、願いがかなった

怒った顔もかっこいいね』

「アホかつ」

ポスターの貼られた掲示板をしたたかに殴った英介は、苛立ちを声にのせて吐き出した。

この犯人、やめる気はさらさらないらしい。文通ごっこがしたいのなら、そばにメモ帳を残せばいいというのに、どうしてわざわざポスターに書くのだ。

勘弁ならない。いやがらせをやめないんなら、こっちにも考えがある。

放課後、美弥に会おう。

五時間目のチャイムが、英介とポスターしかない廊下に響いた。

「ほつといたら？」

同日、放課後。オレンジ色の廊下を、美弥が英介の隣に付き添いながら意見した。

「犯人はね、だれかにかまってほしいだけなの。相手にしてもらって喜んでるのよ。ほら、知らない？ ネットの掲示板とかにひとをおちよくなるようなことを書きこむやつ。そういう手合いは無視するにかぎるわけよ」

凜とした姿勢で歩を進めつつ、訳知り顔で犯人像を特定していく。剣道部所属、かつ風紀委員の彼女はポスター製作の責任者のひとりだ。

英介は絵の作者であるとはいえ、現在、あいにくポスターの取り扱いに関しての発言権はない。掃除強化習慣中において、ポスターの所有権は風紀委員にあるからだ。いたずらにポスターを返してく

れと訴えても、ききいれてはもらえないだろう。そこで、先生たちのお気に入りである優等生の美弥に後ろ盾を頼もうというわけだ。まったくもって虎の威を借るキツネだが、このさい手段は選んでいられない。

「あのさ。本当にポスターを回収するつもり？ もったいなくない？ きみ、一生懸命書いてたじゃない、あの絵」

ふと歩みを止めた彼女が、眼鏡ごしに英介の瞳をまじまじと見つめてきた。

英介は肩で息をつき、

「ああ、心血を注いで描いた。だから回収するんだよ。大事な作品を他人の落書きなんかで汚されたくない。あれはこの世にひとつしかない、俺の魂だからな」

「あたしは逆だな。いろんなひとの目にとまらないと、もったいないと思う。たとえけちをつけるひとがいたとしても、それって、注目してくれてるってことの裏返しじゃないの」

「違う。けちをつけられたんじゃない、作品を汚されたの。製作者の俺が許せないっていつてんの。だからポスターをひきあげるんだよ」

「まあ、いいけど。ただしその落書きつてのがたいしたことなかったら、できれば考え直してほしいな。あれ、あたしが協力したのももあるし」

なんやかんやいつているうちに、ポスターが見えてきた。掲示板の前は相変わらず閑散としており、夕闇に彩られた廊下に人影はない。

証拠として残しておいた落書きをしげしげと見つめながら美弥がつぶやく。

「ふうん。しっかし、ひまな人間っているもんねえ。ポスターにいたず、落書き犯、この近くにいろわ。きみも探して」

唐突に落書き文から顔をそむけた美弥が、剣呑な瞳を周囲に走らせた。

「お、おい、どうしたよ」

怪訝そうに眉をひそめる英介に、油断なく廊下に目を向けながら美弥は黙って落書き文字を指し示した。

『ごめんね、怒らないで』

あなたとお話があったただけなの

えへへ、願いがかなっちゃった

怒った顔もかっこいいね

そのひと、だれ?』

「……なんだ、こりゃ」

おなじみになったセリフを吐きながら、英介は呆然とした。

『そのひと、だれ?』なんて一文、さっきまではなかった。どうやら、英介が美弥を呼びにいつてるあいだに書き加えられたらしい。そのひと、とはだれのことだろう。まさか、美弥のことだろうか。……しかし?そのひと?とはいやな書き方だ。まるで、どこかからこちらを監視でもしているかのような……。……見られてる?どこから?」

凍ったナメクジに背中を這いずり回られるような悪寒を覚え、英介は廊下のすみずみに視線を走らせた。

だれも、いない。

「……本当に、近くに、いるのか?」

「多分ね。どうする、捕まえる?」

「できれば、そうだな」

「わかった。きみ、左をお願い」

美弥にいわれるまでもなく、英介は廊下の左側の部屋を片っ端から調べていった。

美術室。

美術準備室。

図工室。

図工準備室。

等間隔に配置された扉はすべて固く閉ざされている。手をかけて

もびくともしない。

英介はいまさらながらに思いだした。放課後、部活動などが特  
ない特別教室は、生徒を立ち入らせないために力ギがかけられて  
のだ。つまり、廊下左側の部屋にはいないということか。美弥も右  
の教室郡を調べつくしたのか、英介に向かつて首を横に振っている  
……いや、まだ、廊下の突き当たりに、あとひとつだけ調べてな  
い扉があった。

非常口。

避難訓練のときくらいしか活躍しない、極めて存在感のない扉。  
開閉される機会があまりに少ないためか、大量の錆がドアのあちこ  
ちについている。

本当に開くのか怪しみながら、英介がノブに手をかける。ヤギの  
断末魔みたいな軋んだ音をたててゆっくりとドアが開いた。

涼やかな風にほほを撫でられた。

ここは二階。眺めがいい。畑と立ち並ぶ家々が、秋の夕空のした  
でどてつと寝そべっている。微妙な間隔で点在するビルによって作  
られた長い影が、下校中の小学生を食らう魔物かなにかのように見  
える。

英介が爪先立ちで外の踊り場へ出て、一階と三階へ続く砂利まみ  
れの階段を覗いてみるものの、やっぱりだれの姿も確認できない。

「無駄足か。つたく、どこいるってんだ」

「英介えー！ ちょっとこっちー！」

美弥の声。こころなしか、声に焦りがうかがえる。

英介が早足で廊下へ引き返すと、美弥が瞳を細めながらポスター  
に書かれた丸文字を指差していた。

「そのひと、だれ？」

「英介くんと仲がいいの？」

「ちよ……おいおいちよつと待てよ」

増えてる。また書き足されてる。英介くんと仲がいいの？ なん  
て部分、さっきまではなかった。

美弥が英介を振り返って、

「きみが書いたんじゃないよね」

「……おい、いまのいいかたはカチンときたぞ。どこの世界に自分の作品に落書きする作者が」

「きいてみただけよ。念のためいつとくけど、あたしでもないからね」

「そりゃ、そうだろうけどよ。じゃあ、だれが？ 俺ら以外、ここには……」

「待つて待つて、ちよつと整理してみましょ」

鹿爪らしい面持ちで、美弥が状況を冷静に分析していく。

「落書き犯人を捜すために、あたしたちはほんの少しだけ、ポスターから目を離れたよね。ほんの少し。長くて一分くらい。その間にだれかがここにやってきて、ポスターに文を付け足したということになるね」

「だな。……でも、いつのまに、どうやって、書いた？」

そこが不可解な点だった。

目を離れたといつても、英介も美弥もここから動いていないに等しい。ふたりの目をかいくぐって落書きするなんて、不可能だ。

ふと美弥が、訝しげにきいてきた。

「ねえねえ、ところでさ、？ 英介くん？ ってなに？」

「は？ 俺の名前じゃん」

「じゃなくて。なんで落書き犯人、きみを英介くんなんて呼んでるわけ？ ずいぶん親しそうじゃない」

「知らん、っっていうか俺が知りたいわ。ったく、気持ち悪いったらよお」

「まったくねえ。いたずらにしてはしつこいっっていうか、手がこんでるっっていうか。ひよつとしたらストーカーかもね。ほら、みてみてこれ。『怒った顔もかつこいい』って。これ書いたひと、きみのこと、よおく観察してるみたいね」

「気色悪いこというなよ。それよりこのポスター、片付けようぜ。」

これ以上、ストーカーとの文通の道具に使われるのはたまんねえよ」「それは同感だけど、先生が許可をくれるとは思えないな。これ一応、体面的には風紀委員みんなで製作した物になってるし、掃除強化習慣もあと一週間ほどで終了でしょ？ ただのいたずらだ、もうすぐ終わるから我慢しろ、って一笑に付される気がする」

「なんでもいい、とにかく職員室、いこうぜ。悪いけど、先生説得のバックアップ、たのむわ」

「ん……ところで、さ」

職員室へ向かおうとした矢先、ふいに美弥が立ち止まり、宣戦布告でもするかのように廊下の奥へ向けてきこえよがしに大声をだした。

「犯人、気になるみたいねえ、あたしたちの仲っ」

「は？」

怪訝な顔をする英介の右腕に、突如、美弥がしがみついてきた。

彼女のふくよかな胸の双丘が英介の二の腕に、むにゅっと押しつけられる。

英介の時間が止まった。

呼吸が停止し、足は床に張りつき、視線は廊下の壁を凝視したまま微動だにせず、そんななか、心臓だけが冗談抜きで破裂するかと錯覚するほどに高鳴っている。

美弥が餌をねだるネコのごとくさらに体を摺り寄せてきた。熱した餅のような、ふくよかな弾力。長い黒髪の甘い香りが英介の鼻腔をくすぐる。英介の血圧が暴走機関車のごとく上がっていく。のどが詰まり、声が出ない。

……おいおい、なんでだ。

こいつ、なんでこんな真似をするんだ。

こんな場所で、こんなけしからん行為を平然とできる彼女の神経を疑うと同時に、二の腕に全神経を集中させている自分の頭を疑った。「英介、ほら、セリフ。あたしに合わせて」と耳元でささやく彼女の言葉など、もちろん英介の脳には届きはしない。

五秒も耐えきれなかった。

理性が決壊する一歩手前で、英介は美弥の腕を振りほどいた。

「バ、バカッ。離れる、ほら、職員室、いくぞ」

「ちよ、ちゃんと答えなさいってのっ……ああもっ」

むきになつて抗議する美弥を従えて、英介が職員室のドアを開けた。

さて、交渉の結果。美弥のアドバイスどおり、先生からポスター取り外しの許可はおりなかった。

そのかわり先生の手により、『落書き禁止』という、有効期限切れの福引券並に役にたたない注意書きが、ポスターの隣に張られた。

「ん？ あのポスターのこと？ きみ、まだ根に持つてるの？」

ジーパンにタンクトップ姿の美弥が、ベッドに寝そべりつつ目を通していた月間雑誌『いまどきの日本刀』から顔をあげて、隣に座る英介へと呆れたような声をだした。

時刻は夜八時。英介の自室。

そう、ここは英介の部屋……なのだが、まるで美弥、ここが自分の部屋であるかのように羽を伸ばしている。英介もそれをいまさらあだこうだと口を出すことはない。

「そりゃ、がんばって描いた絵にいたずらされたのは腹がたつだろうけど、鉛筆の落書きじゃない。ボールペンを使われたとか、破かれたとか、そういう取り返しのつかないことをされたわけじゃないでしょ」

「たとえばだな」

いまだ制服から着替えていない英介が飲みさしたコーラ缶を机のうえに置いて、

「自分の宝物を赤の他人に壊されたら、どう感じる？」

「そりゃ……うーん、そうとう怒るかな。相手がだれだろうと、た

「だじゃおかないと思う」

「だろ？ 俺にとつちゃ、それとおんなじなわけよ」

「ふうん。なるほど、オツケ。きみの気持ちはわかった」

「反動を利用しつつひょいっと起き上がった美弥が、朗らかな面持ちで提案する。」

「じゃ、今度またいたずらがあつたら、先生たちに内緒でポスター回収しちやおうか」

「？」

「本来なら許されないけどさ、そこまでいやだつたら、掃除強化習慣の終了前にポスターをはがしちゃってもいいんじゃないの？ あたしはかまわないと思うな。作品にこれまで以上の傷がつけられる可能性があるのは事実だし、あれ、きみの作品だしね」

「つて、はがしたあとポスターはどうするよ」

「この部屋に飾っておいたら？ 持ち出しがばれる心配はないですよっし」

美弥にしては珍しく乱暴なアイデアの端々に、英介は彼女の気遣いを感じた。美弥は、英介の気持ちを尊重してくれているのだろう。たしかに、彼女の言い分にも一考の余地があるかもしれない。美弥の隣にごろりと寝そべった英介は、ぼんやりと天井を眺めた。

ふと、美弥が不満げな声を漏らした。

「しっかし、なんであのおとき、あたしのことを彼女だって大声でいってくれなかつたのよ？」

「……は？ なんの話だよ？」

「ストーリー、近くにいたのは間違いないでしょ。だったら、ここにいるのは俺の彼女だっつて、大きな声で宣言すれば、『んま。英介くんつては彼女がいたのね』って感じでストーリーカーも諦めてくれたかもしれないのに」

「あ……そういうつもりであのとき、抱きついてきたのか」

「そ。見せつけてやったわけ。あたしたちのラブラブっぷりを」

「なんだよ、ラブラブっぷりって」

「細かいことは気にしないの」

「細かいことかね……でもさ、危なくねえの？ 俺、ストーカー系のドラマなら昔いくつも見ただけだし、それだと大抵、主人公と仲がよかったり、そばにいるやつから危険にさらされていくんだよな」

「ふ」

眼鏡の奥の切れ長の瞳が不敵に笑った。むくりとベッドから体を起こすや、「ストーカーなんてこうよ。ジャブ、ジャブジャブ」と口にしながら左手をすばやく前後させる。ひよっとしてシャドーボクシングのつもりだろうか。その様子が妙におかしくて、英介は苦笑を漏らした。この子供じみた行動は、きつと彼女なりの励ましなのだろう。ポスターいたずらに気を揉む英介への元気づけパフォーマンス。

英介はベッドに背をあずけ、大きくあくびをした。

たしかに、心配しすぎかもしれない。現実にはドラマじゃない。常識はずれな非常事態など、そうめったに起こるわけないのだ。

## 01 ポスターの落書き(後書き)

作者のたいらひろしと申しますm)(m 普段はpixivというイラストサイトの小説サイドで活動をおこなっております。童話やホラー、ライトノベルからエッチな小説まで手広く投稿しておりますので、どうぞご覧くださいませ)。(【http://www.pixiv.net/member.php?id=1131262】

## 02 エスカレーター

『ごめんなさい。英介くんにきらわれたくない。』

あなたが字を書いてほしくないのなら、わたしは書きません。

どうか私と文通をつづけてください。

私ただ、あなたが好きなだけなの。

私が悪いんだよね。

英介くん、文字を書かないでっていったのに、私、書いちゃったから。きつと、きらってるよね。

ごめんなさい。どうか、きらいにならないで。

これからは、となりのかべに書きます。

私をすてないで。

ああああああ。

どうすれば英介くんが怒らないように許してくれるように書けるのかわからないよ。

私、どうしたらいいの。

どうしたらいいんだろう。

英介くん。好き。

許してくれますか？

きらわないで。

ひとりにしないで。

好きです』

「.....」

朝一番にポスターの様子を見にきた英介は、その場で石の像になった。口だけは『おいおいおい』と動いてくれたが、声はかすれで出なかった。

またしても落書き。

ポスターそのものに落書きされているわけじゃない。書かれているのは、隣の白壁だ。そこに、だ　　　　　と、　　　　　いたい

何十分かけて書いたのか想像がつかないほどの長い文字が。

この犯人、いったいいつ、これを書いたのだろう。

わざわざ朝一番に登校して、書いたのだろうか。

それとも、放課後にひとりで残って？

あるいは、その両方？

夕焼けに染まる廊下の光景が、英介の脳裏をよぎった。

みんなから忘れられた、だれにも見向きもされないポスターの前に、女子生徒がひとりぼつんと立っている。

首の骨が折れてるんじゃないかって角度でうつむいてるから、顔がよく見えない。

右手には手垢にまみれ歯形のついた鉛筆。左手には真っ白い消しゴム。

やおら彼女は壁に手を突いて鉛筆を走らせ始めた。

ここはまるでひとの通らない寂れた廊下だから、目撃される恐れはない。

ただひたすらに想い人への愛を文字にする。「好きです」「きらわないで」「すてないで」

女子生徒が首をひねる。喉からぼきんと鈍い音がする。

彼女はなにを考えているのだろうか。ひよつとしたら、私の彼への想いはこんなもんじゃない、とか思っているのかもしれない。

消しゴムを使い、これまでの告白文を真っ白にしていく彼女。

そして。

「好きです」「きらわないで」「すてないで」

まったくおなじ文章を女子生徒は書いては消し、消しては書いて、何十回何百回とおなじ作業を繰り返す。

彼女はこう思っている。ああ、これを見たら彼、なんて感じるだろう。私のこと、もっと好きになってくれるかしら。きらいにならないでいてくれるよね。だって、こんなに好きなんだもの。

いまにも天に昇りそうな恍惚の笑みを口元に浮かべながら、いつのまにか夕焼けは沈みきってあたりは真っ暗に、

電気もつけずに女子生徒は丸まった鉛筆で白い壁に幾度も幾度も、思いの丈を書き綴った彼女はゆらりと移動する。ポスターのある位置から死角となる壁際へ。

そのまま彼女は待ち続けるのだ。いとしの彼がこないか、と。やがて朝がくる。

そして彼がきた。壁の恋文をみて、驚いている。

暖かな瞳で見守る彼女。

いまでも、彼の背後から、じつと。

「またいたずら書き？ って、うわ、サイコねえ」

のどまで出かかった悲鳴を辛うじて飲みこみ、英介は背後を振り向いた。いつのまにやら、美弥が英介の背後に陣取っていた。

「……つくりした！。な、なんで、ここにいるんだよ？」

「きみがこつちにくるのが見えたから。にしても、これ」

深刻げな面持ちで、美弥がつぶやく。

「今回はポスター自体に変なことは書かれてないけど、ちょっとまづいなあ。エスカレーターしてきてる」

「あ、あんだつて？」

「きみの話では、初めのうちはちよろちよろとした文章だったんでしょ？ ?すき？とか？かつこいいね？みたいな。でも、ごらんなさいな、これ」

壁のおびただしい落書きをあごでしゃくる美弥。

「慣れも生じてきたんでしょね。内容も大胆になって、文量も増えてきてる。ポスターは無傷だけど、もうポスターがどうか、そういう次元の問題じゃなくなってきてるっばいわ」

筆箱から取り出した消しゴムで壁をこしこししていたずら書きを消した彼女は、

「うん、やつぱはがしちゃお」

というなり、ポスターの四隅のマグネットをはずし、傷がつかないように丁寧にくるくる巻いて英介に差し出した。

「んじゃ、英介が保管してね」

「……いきなりだな、おい。っていつか、はがすんなら帰りがけでもいいんじゃない」

「意思伝達手段のポスターをはがしちゃえば、きみといたずら犯人との接点はなくなるわけでしょ？ こういうのは早いうちがいいのズルズルいくよりはね。それとも犯人との交換日記、まだ続けたいわけ？」

「んなわけねえだろ」

「だったらいいじゃん。先生にはあたしからうまくいっとくわ。じゃ、教室に帰るね」

ひらひらと手を振る美弥の背中を呆然と見つめながら、ポスターをもてあそぶ英介。

遠く、おなじみのチャイムが始業を告げた。

古臭い机から顔をあげた英介は椅子に座ったままうーん伸びをし、ポスターのタヌキ面の女子生徒とにらめっこした。我知らず、顔がほころぶ。

美弥の言葉どおり、ポスターをはがしたその日から今日までの二日間、いたずらはされなかった。

当然である。原因となったポスターは、こうして持ち主の部屋に飾ってあるのだから。英介の家に泥棒に入りでもない限り、もう手出しできないのだ。

英介は安堵する。こいつが無事でよかった。

これは特別な作品だ。勇気を振り絞って美弥を誘い、すべてを込めて描きあげた入魂の一作。もう日の目をみることはなくなってしまうけれど、それはそれでしょうがない。どこかの無神経に傷をつけられるよりはましだ。

スズムシの声が閉じられたカーテンの隙間からきこえる。新聞紙や画材で汚れきった自室を一瞥しつつ、英介は気を取り直して机に

向かった。机上には、大型の画用紙。

いま手がけているのは、市の展覧会に発表するための風景画だ。

風景画というのは写生が多い。美しい風景を現場におもむいてじっくり觀賞し、そのうえで画用紙にむかって筆を走らせる。細部まで描写するのが風景画の醍醐味といっても過言ではない。ただ英介の場合、モチーフとなっていてのが近所の川原だ。あそこなら、下書き程度なら見なくてもかける。実際、今日の学校からの帰路、現場へ寄って目に焼きつけ、ついでにメモ帳にラフ画スケッチまでしてきたのだ。まあ、実物の風景とは若干の違いはあるにしても、これはあくまで下書き。少々の差異ならば許容範囲内だろう。

英介はうでを鳴らし、先の丸まった鉛筆を握りしめ、ほんの一秒で視界から画用紙以外を排除した。

英介の指の動きに合わせて筆が紙面を滑る。絶妙な筆圧でもって、白い紙上に川波を走らせていく。空に雲、地には尾花。過ぎゆく時を想い、そよぐ風を見て、揺らぐ匂いを感じ、川原のすべてを白と黒の世界で表現する。

夢中。

無我の境地とまではいかないが、それに近い状態に英介はあった。

「英介えーっ。ごはんーっ」

「わあかったーっ」

階下で叫ぶ姉に生返事をしつつ英介は絵描きを続行した。

英介が手がけているのは秋の光景だ。夕暮れに近い時間帯。太陽が橙色に染まるころをイメージしている。

現場を見なくても描ける。子供のころから通いつめた景色だ。春の陽光も、夏の夜空も、秋の花々も、冬の雪景色もすべて心のなかにある。

画用紙と絵の具と川原に誓う。きれいに描いてやるからな。英介は絵筆を上下左右に何千往復もさせ、描いて、描いて、気の遠くなるような集中力の元に絵を仕上げていく。

そうして、どれくらいの時間が経過しただろう。スズムシの

声もいつしか鳴りを潜め、代わりにどこかで犬が吠え始めた。

肩がこったので伸びをして、ついでに目覚まし時計を確認する。  
夜中の十二時だった。

「めしっ！」

家族を起こさぬよう、英介はなるべく音をたてずに階段を駆け下  
りた。

あとの祭りだった。

夕食はもはや影も形もなく、代わりに一枚のメモが置かれていた。  
英介は絶望のうめき声をあげた。

『あんまり遅いから作ったソーメンは全部いただいちゃったぜ。食  
べたきや自分で茹でることだぜ』 怪人姉ちゃん仮面』

## 02 エスカレート（後書き）

作者のたいらひろしと申しますm）（m 普段はpixivというイラストサイトの小説サイドで活動をおこなっております。童話やホラー、ライトノベルからエッチな小説まで手広く投稿しておりますので、どうぞご覧くださいませ）（）【http://www.pixiv.net/member.php?id=1131262】

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2429z/>

---

【ラノベホラー】彼のポスター

2011年12月11日12時50分発行